

# 第3章 参加者感想

## 参加者が学んだこと、今後取り組んでいきたいこと

<p>宿泊研修での経験を踏まえ、冷静な判断と行動ができると思う。災害時は、周りの人々に先立って行動したい。今回の学びを、自分のため、周りのために、忘れないよう覚えておきたい。</p>	生徒
<p>宿泊研修での様々な活動をきっかけにいろいろな人と話をすることができ、自身を向上させることができた。また、今後、積極的にボランティア活動に参加したいと思う。</p>	生徒
<p>今住んでいる町に住めることが当たり前だと思っていたが、事前の力により一瞬で住めなくなることを知り、現在の状況に対しありがたく感じるべきであると学んだ。さらに、自分の町をよりよくするのも自分たちであることを学ぶことができた。</p>	生徒
<p>テレビで私たちが見るものには、復興に向けて頑張っているという、きれいな部分しか伝わってこない。そのイメージのまま被災地を訪問したが、現地で見たりしたものとは全く違っていった。私たちは現状を伝えていく必要がある。学んだことを、学校の人たちや知り合いに伝え、広げていきたい。</p>	生徒
<p>「備え」が大切であると感じた。避難所になるところには、あまりにコミュニティが少なすぎると感じた。たくさんの方のことを想定して、地震や災害に備えたい。</p>	生徒
<p>まずは、学校において、この合同防災キャンプで得たこと、経験したこと、見たもの、体験したことをまとめて発表したい。これから、社会に貢献していくために、様々な資格を取得していきたい。</p>	生徒
<p>災害が起こった時に対する備えをしっかり行いたい。東京にも防災について学べる場所があるので、そのような場所へ参加し、意識を高めていきたい。</p>	生徒
<p>私たち高校生にとって、災害対応でできることは少ないかもしれないが、自分たちができることを考え、行動していきたい。</p>	生徒
<p>自宅の備え、災害ごとの避難経路を確認しておこうと思う。しかし、避難経路どおりに避難しても必ず助かるとは限らないことも学んだ。複数の避難経路を考えて確認しておかなければならない。</p>	生徒
<p>一番重要なことは、「日頃から準備し、周りとの情報を共有すること」だと考えた。そこで、見聞したことを他人に話したり、日頃から家族で避難経路について話し合ったり、さらには、自然災害などについての知識を深めたりすることが、防災の第一歩だと思う。</p>	生徒
<p>人を本当に救えるのは人であるということが分かった。自分が居住する島では、いろいろな状況が内地と異なる。起こり得る災害と、その対処について、更に正確に学んでいきたい。</p>	生徒
<p>初めて会った人と話すことは難しいが、宿泊研修での作業などを通じて、初めて会った人とも話す体験ができた。</p>	生徒
<p>「防災士」の資格を取得するからには、災害時に瞬時に考え、一人でも救いたいと思う。また、被災地で学んできたと分かってもらえるよう行動していきたい。</p>	生徒
<p>宿泊研修に参加したことで、福島県の現状を学んだとともに、自分は東日本大震災について知っていたつもりが、実際は何も分かっていなかったことに気付かされた。一方で、これから防災に関して、自分に何ができるかを考えるきっかけとなった。次の災害が発生した際、助かる命を助けることができなかったということがないよう、日頃からの訓練を大切にして、真剣に取り組んでいく。</p>	生徒
<p>宿泊研修に行く前は、福島県で放射能は大丈夫か、食べ物は平気かなどと考えることがあったが、様々な体験により、福島県は安全であることを知ることができた。食べ物も安全でとてもおいしい。宿泊研修の3日間は忘れることのない3日間となった。</p>	生徒
<p>福島県に行って、これまで見たことがない状況に驚きもあった。世界観が変わる3日間であった。被災者が依然と同じ環境で生活することは困難だが、より良い生活ができるように協力していきたい。</p>	生徒
<p>今まで映像でしか見たことがなかったものを実際に見て、いろいろ学び、考え、内容が濃い宿泊研修であった。</p>	生徒
<p>首都直下地震が起こることを想定して、自宅の家具や整理整頓を見直したい。また、東京防災を読み直して、応急措置や避難の方法を覚えたい。</p>	生徒
<p>家族が福島県で被災し、実際に被災地に訪れた日から防災に興味をもち始め、将来も防災に関わる仕事に就きたいと思っている。自分なりに東日本大震災に関する知識を身に付けていたと思っていたが、被災者の話を聞き、それ以上のことを知った。災害に強い社会を作り上げたいという夢を叶えるために、合同防災キャンプで学んだことを生かしていきたい。</p>	生徒
<p>宿泊研修を通じて、当時、現在、これからの福島を知ることができた。復興は遅れていたが、交流した福島の方々は前向きであった。防災や避難所に関する知識も深まったので、それを生かして普段からの備えやシミュレーションを大切にしていきたい。</p>	生徒

<p>宿泊研修を通じて、福島原発について様々考える機会があった。我々は少なからず原発の恩恵を受け、その原発が事故を起こしても、我々は遠くのほぼ安全な場所にいる。この状況をどうにかすることこそが、防災だけでなく地方との格差の問題などに解決の糸口を見出す鍵になるのではないかと思う。</p>	生徒
<p>宿泊研修を通じて、人とのつながりの大切さを感じた。様々な人と関わりをもっておけば、災害時などのいざという時に役に立つことを学んだ。</p>	生徒
<p>宿泊研修のカリキュラムを通じて、ボランティアや物資の扱いに関する課題を感じた。人々はボランティアに参加することに良いイメージを抱いているだろうが、ボランティアを調整する、受け入れる側はボランティアに参加する人を有効に活用できているだろうか。適材適所に割り当てられているだろうか。様々な課題が多いことに気付いた。また、少ないけれど被害が発生した地域における援助の仕組みについて気になった。今後学んでみたいと思った。</p>	生徒
<p>日々の備えがいざという時にとても役立つこと、日々備えていなければいざという時何もできないこと、命は自分でしか守れないこと、宿泊研修においてこれらのことが心に残った。</p>	生徒
<p>将来、教育に関わる仕事をしたいと考えている。この合同防災キャンプに参加した経験が、その時に生かすことができると思う。請戸小学校や避難所開設の話などの学んだことを生かし、これから更なる学びに生かしていきたい。</p>	生徒
<p>実際に行って感じたこと、思ったことを友達や家族に伝えていきたい。また、忘れないようにしたい。教わったことを自分たちが災害に遭った時に発揮したい。</p>	生徒
<p>合同防災キャンプでは多くのグループワークがあった。そこでは、意見が違っていても尊重し合うことが大切であると感じた。今回学んだことを生かして、防災グッズの準備や、避難経路の確認などすぐに行動していきたい。</p>	生徒
<p>祖父母が浪江町に住んでいて被災した。地震発生後に浪江町に訪れた時よりも今は人が増えていた。一方で、浪江町に戻ろうとしている人が少ないことも感じた。ふたば未来学園高等学校の生徒と話したり、質問したことで、その地域の様子を知ることができてよかった。災害時にどのようにすれば良いか、たくさんの人に知ってもらい、全員が備えるべきだと感じた。</p>	生徒
<p>福島県に行き、考えることがたくさんあった。困難な課題が山積みであることを感じた。しかし、その課題を深く考え、自分なりの答えを出せるようになりたいとも思った。宿泊研修で学んだことはたくさんあるが、逆に、もっと知りたいこと、知らなくてはいけないことも発見できた。この貴重な体験に感謝するとともに、この先も追求していきたい。</p>	生徒
<p>宿泊研修に参加したことで、震災時の状況、避難所の状況を把握することができ、自分が同じ状況になった場合の参考になった。これを生かして、今、災害が起こったらということを考えながら、日常生活を送りたい。</p>	生徒
<p>宿泊研修に参加する際、「自分で実際に見て確かめる」というテーマを決め、挑んだ。思っていたとおり、自分が知っている情報は少なく、現地に行かないと分からないことだらけであった。津波の被害を受けた光景を見た時には、言葉を失った。この経験を生かし、行動に移していきたい。</p>	生徒
<p>まずは自分の身の安全を守ることから考え、避難経路を考えて整理しておく。家族を始め、様々な人に、まずは自分の命を守ることを伝えたい。</p>	生徒
<p>災害に備えるためには、地域について知ることの重要性を学んだ。なので、近隣の道を覚えたり、防災訓練に参加することを通じて地域について学んでいきたい。</p>	生徒
<p>様々な見方をしなければ復興などできないことを学んだ。災害に関しては様々な立場により課題があり、既存のマニュアルでは解決できない想定外なことが多く、前向きに一つ一つ協力しながら取り組む必要があることを学んだ。</p>	生徒
<p>防災に関する知識を自分だけでなく、様々な人と共有して一人一人が意識的に防災について考えられるように活動したい。</p>	生徒
<p>参加したことで、災害への考え方、人と人とのつながりについて知ることができた。貴重な体験であった。周りの人に伝え、お互いに防災意識を高めたい。</p>	生徒
<p>まず自分ができることとして、福島県がどのような状態なのか、福島県の良いところを工夫して周りに伝えていきたい。そして、高校生である私たちにできることは限られているだろうが、高校生としてできることを探し、積極的に取り組んでいきたい。</p>	生徒
<p>避難所運営の講座では、支配ではなく自治を第一にすることを知った。防災士はそういう立場になる人間だから、より責任感をもち、正解のない問題の中で最善を選んでいきたい。最近、災害がとても多い。その中で、自分ができること、やらなければいけないことを考え、行動し、防災士としての役割を果たしていきたい。</p>	生徒



普段から身の回りの出来事に関心を持ち、当事者意識で想像力を働かせたい。防災のために何か特別なことをするのはなく、日常の意識を少し変えることで、災害に遭った時に焦らないようにしたい。	生徒
福島県に行き、実際に見聞したものと、これまでテレビなどで見聞していたものは違うと思った。私たちは、何を考えて、これから先どのように行動していけばよいのかを考えさせられた2泊3日であった。	生徒
震災に備え、しっかりと家族で話し合いたいと思った。自宅には、防災バッグも非常用の食料も水も常備されているが、確認したら賞味期限が3年も過ぎていた。これからは、こまめにチェックし、更新していきたい。また、震災が起こった際に、どうやって家族と合流するか、どこに避難するのか考えておきたい。	生徒
テレビなどでは見る機会が少なくなった今の福島県の現状を知ることができた。福島県の現状を学校の友達だけでなく、東日本大震災を知らない子供たちに伝えていきたい。	生徒
今まで、防災について学ぶ機会が少なかったが、これをきっかけに、今後ボランティアなどに積極的に参加していきたい。	生徒
参加しなければ聞けないような話をたくさん聞くことができ、実際に見て学ぶことができ、充実した研修であった。被災地の状況を他人事に思っていた自分に気付き、被災した方の気持ちを知ることができて良かった。	生徒
今回学んだことを、東日本大震災を経験していない次の世代へ伝えていかなければならない。教える立場になっていきたい。	生徒
初めて会った仲間と協力して作業することは、ボランティアの基礎になると感じた。まだ、実際に行動に移せる自信がないので、ボランティア活動などで経験を積んでいきたい。	生徒
被災地の様子を学校や家族に伝えなければならない。私ができることは、避難訓練をしっかりと行う、見聞したことを友達に伝えることである。	生徒
どんな状況で震災に遭っても、慌てすぎないように想定をしておく。また、パニックになったバラバラの人の中でコミュニティを作るためには中心となる人が必要である。私は、中心となる人やその人を支えられる存在になりたい。	生徒
災害時にどこに避難するか、家族の安否確認はどのように行うかといった会話が、東日本大震災発生当時以来なかった。今一度、家族で話し合いをして、災害に備えていきたい。また、自分が復興に携わることができることは少ししかないと思うが、その少しで誰かを笑顔にしていきたい。	生徒
福島県で発生した被害を知ることができ、メディアでは話されることがないこと、福島県の方が思っていること、人の命を守ること・助けることの大変さ、災害についてよく知ることができ、考えさせられた。これらを他の人に伝えていきたい。	生徒
福島県浜通り地域を訪問し、想像していたよりも復興が進んでいないことが分かった。また、時代が変わっても避難所の実態は進化していないことを知り、これからも発生し得る災害に備えて避難所を進化させていかなければならないと感じた。	生徒
私の感覚では、東日本大震災の発生からかなりの月日が経ったと思うが、被災地ではまだまだ復興しておらず、心が重いと感じた。人とのつながりを大切にしつつ、自分にできることを精一杯やしていきたい。	生徒
現地で見聞したことも重要であるが、様々な参加者や交流先の人と知り合えたことも重要であった。宿泊研修では、知らない人とコミュニティをもつことの難しさと重要さを学びつつも、3日間でどれだけコミュニティを作れるかという「訓練」のようにも感じた。この縁を大事にしていきたい。	生徒
地域との関わりを増やし、ボランティア活動をしたり、いつ災害が起こっても大丈夫なように備えをしておく。これらが地域の防災力の向上につながると思う。積極的に活動していきたい。	生徒
合同防災キャンプを通じて、防災についての意識を強くもつようになった。また、自分が居住している地域の方々と交流をもつべきだと感じた。防災士として、地域に役立てることをしていきたい。	生徒
合同防災キャンプに参加し、たくさんの課題があることに気付くことができた。地域や国、国境を越えて様々な単位で取り組むべきことはあるが、まずは身近なところからコツコツと始めることが重要だ。そこから始めていきたい。	生徒
自分の中の防災や復興の概念を改めることができた。私の中で防災とは、普段と変わらない生活を、被災後もなるべろ続けられるように準備することである。今後、「防災とは、復興とは何か」という疑問を多くの人に考えてもらえるよう、行動してもらえるよう取組んでいきたい。	生徒
今後取り組んでいきたいことは、避難所運営演習を通じて学んだ公平と公正についてである。平等だけ人によって違った接し方を心掛けていきたい。また、初めて会った人たちと合同防災キャンプを通じてコミュニケーションが取ることができたが、これも防災の一つであると感じた。	生徒

福島県の被災地で見聞し、今までに聴いていたことに加え、また違った新たな発見や考え、感情が生まれた。災害時の状況を甘く考えていた部分があったが、学んだことを踏まえこれからの自分の行動につなげていきたい。	生徒
宿泊研修で最も衝撃的であったことは、震災関連死の人数の多さであり、被災者の心の病が原因であることが多いということである。今回の研修で、心理学について学び、少しでも震災関連死の増加を抑えたいと思った。	生徒
地域の防災訓練などのイベントに参加して交流を深めたい。一緒に合同防災キャンプに参加した友達と振り返り、更に見聞を広めていきたい。	生徒
普段の生活の中で、今ここで地震が起こったらどうするかなどを考えて、実際に起こった時にパニックにならないようにしたい。また、災害が起こった時だけでなく、普段から近所の人とコミュニケーションを取り、助け合える仲になっていきたい。	生徒
地域の防災訓練に参加し、自らの防災意識を高めつつ、地域に貢献したい。また、災害時には募金活動やボランティア活動に協力して、救助する側になっていきたい。	生徒
現地の方々には、凄惨な被害を風化させないために、私たちに多くのことを教えてくれた。これを周囲の人に伝えていき、災害の口承や防災力の向上に励んでいきたい。これからも復興に対して自分ができるところをしていきたい。	生徒
今回学んだ知識をいざという時の助ける力にしたい。さらに、その時が来る前から、学んだことをいろいろな人に伝え、より多くの人々が正しい知識をもてるように尽力していきたい。	生徒
宿泊研修で一番印象に残ったことは、震災関連死についてである。心理学に興味があるので、その勉強の一環として更に詳しく学びたい。また、この経験を自分の中だけに留めておかず、多くの人に伝え、震災が起こっても多くの犠牲者が出ない国にしていきたい。	生徒
物資や知識ももちろん大切だが、コミュニティが何事においても重要であるということが分かった。これからの未来を担う私たちが、より交流を深め、日本の将来について話し合うことで、東京都内のコミュニティが広がっていくのではないかと考えた。まずは、校内で自分の経験した全てを話せる場を作りたいと思う。	生徒
地震や津波の影響で自宅や通っている学校を失ってしまう人がたくさんいることを聞いたりして、自分もいつ同様の状況になってもおかしくないと思った。他人事ではない。また、学校の避難訓練の大切さを改めて感じた。今後、災害ボランティアにも参加して積極的に行動していきたい。	生徒
コットン畑の方が「皆さんが学んだことは記憶に留めるだけでなく、発信・活用してほしい。」と話していた。今回は、都内で選抜されたメンバーで訪問した2泊3日で、本当に貴重なものであった。今回この経験を発信していく「義務」が自分たちにはあると思った。	生徒
今回宿泊したJヴィレッジはサッカー場としての凄さだけでなく、東日本大震災において重要な場所であったことも学んだ。被災地の今の状況、避難した人たちの現状、そして、その対応に当たった人たちの現状を知ることができた。	生徒
直接行って感じるという、体験の大切を学んだ。また、それを伝えていきたい。防災士として、災害が起こったとしても、すぐに対応できるようになっていきたい。	生徒
避難所の使命は命を守ることである。そのために、人と人がつながる仕組みの構築が大切である。過去の教訓を生かして福島県の避難所でも交流の場を設営し、孤独死を少しでも防ぐことにつながったようである。このように学んだことを、今後災害に遭遇した際には生かしていきたい。	生徒
「もし、〇〇だったらどうする?」という課題意識をもった生活を心掛けるとともに、「想像力(イマジネーション)」を大切にしたいと思った。	生徒
普段の現代文の授業において、「近代化によって社会は特殊化しているため『文明が進めば災害は大きくなる』」だとか、「近代化によってつながりが失われ、現代社会はこのことが問題となっている」といった話をしてきたが、防災キャンプでの体験がこの言葉の重みを変えたように感じる。学校で学ぶ知識が生徒たちの命と大切な人・物を守るための力になることを改めて望むとともに、自身の経験がそれに資するものになるよう今後も学ぶ姿勢を忘れずにいたい。	教員
理科教員として、生徒や身近な人に正しい放射線との関わり方を伝えることはもちろん、初日と2日目に学んだ避難所運営についての心掛け、日頃から人と人とのつながりを大切にする姿勢、いつどこで困難な状況に遭遇しても冷静に状況を判断できる力を身に付けることなど、今できることから実践を積み重ねていきたい。学校教員は一般よりも高度な防災の知識経験を身に付けておかなければならないという意識と、保護者からお預かりしている生徒の安全を高いレベルで守るという決意を常に持ち続け、東京の防災力を高める一員であり続けたい。	教員



<p>講師の質問に対する回答でも、参加生徒からは「なるほど」となる回答をする場面を何度も見掛けた。高校生の柔軟さや新鮮さを土台に、確かな知識やそれを活用できる場面を与え、考えさせ実行することができる場をどうやったら作れるのか、民間や研究機関の活動をなどを参考に、本校の実情に応じてアレンジできるようになりたい。まずは、今回自身が学んだことを学級・家族に還元していく。</p>	教員
<p>親しい人たちと、防災の話をしたい。宿泊研修の間、同じ班の教員たちと長い時間防災について話をした。自分では気付いていなかったことに気付かされたり、考えたりする時間を長くもつことができた。そのことを踏まえて、様々な立場の人と防災について話をしたい。しかし、まずは我が家の防災から始めたい。日中に災害が発生した場合の家族との連絡手段、合流地点、離れて暮らす家族との連絡方法、避難セットの確認、家具の固定など身近なところから始めたい。また、ペット同行避難、ペットの防災について考えていきたい。「犬と一緒にいないなら避難はしない」と言った母、特別警報の最中避難しない家に鳥がいる友人たち、犬を連れていて避難所に入れてもらえなかった話など様々聞いた。そういう人を減らしたいと強く思う。</p>	教員
<p>福島大学の天野先生が語った言葉の中に次のものがあった。「人を救うのは人しかいない」この言葉が、平時においても非常時においても全てであると思う。教員の立場で、生徒や保護者・地域住民に対して、この言葉を肝に銘じて役割を果たしていかなければならない。意識改革であれ、組織改革であれ、小さな変化であれ、その全てが防災であり、減災につながっていくと感じている。今回学んだことは、この災害大国である日本で、自分を助け、人を助けるための貴重な経験であった。この経験を生かし、誰かのために役立つ自分であり続けたい。</p>	教員
<p>これまでは被災した現地についてメディアを通じて見たりインターネットを利用して調べて学んでも、単なる情報としか認識していなかったが、宿泊研修を通じて現地に行ったことで、東日本大震災は身近な出来事であったと実感した。このことが宿泊研修を通じて一番感じたことである。校内での研修はもちろんであるが、地域の防災訓練や校内での防災教育委員会に参加し、校内での安全教育をよりよくしていく一員になりたい。被災した時、実際にどう行動するか教員間で情報共有し行動できるよう手だて等を検討していく。</p>	教員
<p>時間が経つごとに取り上げられなくなっていくのが災害報道の常だが、今回は自ら感じることで、そして考えることができた。全ての人に被災者の話を聞く機会があるわけではない。全ての人々が被災地に向けるわけでもない。限られた機会を与えられ経験をした自分も、今後は語り部になっていきたい。正しい知識を、事実を知らない人に伝えていきたいと考えている。そうすることが災害への備えにもなっていくのではないだろうか。</p>	教員
<p>防災において最も大切なことは、人と人とが交流する「横糸」と、管理するのではなく、お互いに協力して自治を行う「縦糸」である。いざというとき、その判断が避難生活を過ごしている人の命を救う決断なのかどうか、一人では荷が重くて考えることが難しい。だからこそ、複数の目で考え、公正・公平な判断を出すことが大切であると生徒や教職員に伝えていきたい。</p>	教員
<p>「さすけなぶる」の避難所運営演習で学んだ「管理でなく自治」、「人の命を守る」ことを前提に行動することを今後の生活で意識したい。学校では生徒を管理しがちであるが、被災時に自分たちの力で生き抜くことのできる子供たちを育てるためには、管理をするだけでは何も生まれない。生徒の自治を促し、生徒のやりたいことに寄り添うのが真の教員であると思う。どんな状況でも自分たちで考えて生き抜くことのできる力、多くの人と協力をして一人でも多くの命を助けることができる力を子供たちに身に付けさせることのできる防災士を目指したい。</p>	教員
<p>東日本大震災の発生以降、宿泊防災訓練が行われ、話をする機会が多くなった。これまでは、被災写真の画像を見せ、避難について生徒に考えてもらう方式で進めてきた。今回の経験を踏まえ、さらに、避難した先においてどのような行動をとるべきか、避難所での生活を快適に過ごすためにはどのようにしたら良いかという視点でも話をしていきたい。</p>	教員
<p>被災された方や被災された方を救うために尽力された方々の話を直接伺うことができたことは、大きな収穫であった。自分自身が見聞したことを、東京が被災した時に、実際の行動に移していきたい。合同防災キャンプで得たことを、避難訓練後の講話などで紹介し始めた。再度、被災地を訪れたり、防災知識を深めたりするなどして更に力を付け、生徒への防災教育に尽力していきたい。</p>	教員
<p>合同防災キャンプに一度参加したからといって防災リーダーとしての資質を得たとも思えない。ここで得た学びを防災教育推進の契機とし、他の教職員を巻き込んだ防災教育を実践していくことが肝要である。防災教育とは、「人として生きる」力を高めることである。生徒の主体性や協調性、想像力を働かせる学びの場を積極的に生み出し、被災してもしていなくても、幸せに生きることが出来る生徒の育成を目指していく。</p>	教員

「合同防災キャンプ2019」を実施するに際して、次の各団体及び講師の方々、さらに福島県の方々に御協力いただきました。御礼申し上げます。

#### 〈協力団体〉

一般社団法人まちづくりなみえ  
公益財団法人東京防災救急協会  
Jヴィレッジホテル  
特定非営利活動法人ザ・ピープル  
福島県環境創造センター  
福島県立ふたば未来学園高等学校

#### 〈防災士養成講座講師〉

天野 和彦（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授）  
伊藤 みゆき（気象キャスター）  
加藤 孝明（東京大学生産技術研究所教授）  
甘中 繁雄（特定非営利活動法人日本防災士機構理事）  
志賀 隆充（双葉地方広域市町村圏組合消防本部係長）  
中野 晋（徳島大学教授）  
秦 好子（社会貢献学会理事）  
松本 仁志（福島県いわき市立小名浜第二中学校長）  
吉田 恵美子（特定非営利活動法人ザ・ピープル理事長）

## 編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課

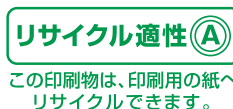
#### 〈本書作成担当〉

東京都教育庁指導部指導企画課長	小寺 康裕
東京都教育庁指導部主任指導主事	桐井 裕美
東京都教育庁指導部指導企画課統括指導主事	金澤 剛志
東京都教育庁指導部指導企画課課長代理	小林 純也
東京都教育庁指導部指導企画課指導主事	菅野 恭子

#### 合同防災キャンプ2019報告書

東京都教育委員会印刷物登録 平成31年度第18号 令和2年2月

所在地 〒163-8001  
東京都新宿区西新宿二丁目8番1号  
東京都庁第二本庁舎15階  
電話 03-5320-6836  
編集協力・印刷 京王観光株式会社



石油系溶剤を  
含まないインキを  
使用しています。